

憂目の巫女

成

人

指

定

Adult
Only

【前編】

憂目の巫女

【前編】

成人向け作品

こまり屋

この物語はフィクションです。
実在の人物や団体などとは関係ありません。

【前編目次】

第一章	はじまりの口づけ……	5
第二章	発情の雌巫女 ……	19
第三章	屈辱なる口戯 ……	51
第四章	祓えぬ淫霊 ……	71
第五章	被虐の目覚め ……	99
第六章	色付く痴癪 ……	155

は
じ
ま
り
の
口
づ
け

春の夕暮れ。

前に行く生徒たちは思い思いの話をしながら歩き、誰かが笑い声を上げる。部活動の時間が迫り、器具を用意している者や準備体操をしている者、ストイックにランニングをしている者などで校庭は賑やかになっていく。

だが帰宅部の南見奏多の居場所そこにはない。野球部の一年がトンボを掛けているのが視界に入ったが、奏多は振り返らずにその喧騒を抜けていく。そして校門で待っている人物と合流し、歩き出す。

学校からの帰り道、この道を二人で歩くのは何百回目になるのか。今となっては出雲陽菜が奏多の横を歩くのは当たり前のことになっていた。

「ねえ、今日の数学の授業、聞いてた？」

陽菜が奏多を見上げる。

「昨日寝れなくて爆睡してた」

「やっぱり……奏多くん、もうすぐ模試あるのわかってる？」

「知るかよ。赤点取らなきゃ問題ないだろ」

「はいはい、そんなこと言って、結局またわたしに泣きつくんだから」

「泣きついたことなんてないだろ」

「この前の期末テスト、わたしの家で五時間ぶっ通しで勉強したの、誰だったっけ？」

「……それは」

陽菜は呆れたようにため息をつき、そして、ふっと笑った。

「ま、いいけどね。奏多くんがバカすぎると、わたしも先生に『もっとちゃんと教えてあげて』って言われるから」

「へえ、つまり俺の成績が悪いのは、お前の責任ってことだな」

「えっ」

「なら、もっとしっかり教えてくれよ。先生に怒られんの、お前だし」

「それ、理不尽すぎない？」

「そうか？ 俺は合理的だと思うけどな」

陽菜は肩をすくめて、「はいはい」と苦笑した。

こうして二人は、くだらない話をしながら歩く。

風が吹き、陽菜の髪がざらりと揺れる。軽やかに歩くその姿を、奏多は何気なく目で追ってしまふ。

「……なあ、陽菜」

「ん？」

「お前、勉強楽しいの？」

ふと思ったことを口にした。

「え？ うーん……まあ、嫌いではないかな」

「俺には理解できねえな」

「数学とか難しい問題が解けると、ちょっと気持ちよくなるよ？」

「そんな感覚、一度も味わったことねえな」

「奏多くんの数学の答案、いつも壊滅的だもんね」

「悪かったな」

「ふふ、ごめんごめん」

陽菜は楽しそうに笑う。

自然体で、飾らない会話。こういう時間が奏多はたまらなく好きだった。

それが冗談なのか本心なのか、奏多にはわからなかった。けれど胸の奥で何かがざわついた。

陽菜は、奏多に合わせて歩く。奏多の言葉に笑い、助けてくれる。これからもずっとこんな風に過ごしたい。奏多はそんなことを考えてしまう自分が、少し怖かった。

「あー、お二人さん、今日も一緒に下校？ お熱いですねえ」

背後から声を掛けてきたのはクラスメートだ。おせっかい焼きで有名な女子。

「あー、はいはい、そうですねえ」

陽菜との下校をからかわれるのは何十回目だったか。初めはちょっと恥ずかしかったが、

ここまでくるともう慣れっこという奴だ。

「別に、家が近いから一緒に帰ってるだけだよ」

慣れているのは陽菜の方も同じようで、軽く受け流している。

「はああ、あのね、奏多くん、ちよつといい？」

「俺に？ 何だよ？」

「いいから！」

その子の強い調子で奏多は断り切れず、陽菜を置いてその子の方へと引っ張られてしまう。

「あんたね、いつまで陽菜を待たせるつもり？ これで付き合っていないってあんた、もう犯

罪だよ、これ」

「いいだろ、別に」

「見てるこっちがもどかしいって言うてるのよ。これ、クラス全員がそう思ってたから」

「……」

そう言われると奏多も返す言葉がなくなってしまう。実際に奏多と陽菜は、ほとんど付き合っているものとして扱われている。

「だから、ほら、告って。今日中に。ていうか、今ここで」

「そ、そんなこと、出来るわけないだろ」

「ま、それはさすがに自分のタイミングですべきだけど。でもあんまり遅いと他の男に取ら

れちゃうよ。陽菜、人気凄いんだから。今日も告られたらしいよ」

そんなこと、言われなくてもわかってる。こんなに可愛くて面倒見がよくて、何より子供のころからずっと一緒にいた陽菜が、他の男のものになって欲しいわけがない。

「ほら、わたしは忠告したからね。それじゃ！」

それだけ言うとその女子は陽菜に手を振りながら去って行った。

「何の話だった？ 大丈夫？」

奏多は陽菜と再び歩き出したが、流石に気まずそうにする。

「あ、いや、大した話じゃないよ」

微妙な返事をしてしまった。不思議そうな顔も可愛い陽菜。

「なあ、お前、将来のこと考えてんの？」

「将来？」

雰囲気を変えたくて、奏多は適当な話題を振っていた。

「大学とか、行くのか？」

陽菜は少しだけ考えるように目を細めた。

「うん……神社のこともあるし、どうしようかなって悩んでるけど」

「やっぱり神社を継ぐのか？」

「どうだろうね。でも、わたし以外に継ぐ人いないし」

「そうか」

奏多は、なんとなく言葉に詰まる。

陽菜の家は、町のはずれにある神社だ。幼い頃から、彼女はそこで暮らし、手伝いをしてきた。

奏多にはよくわからない世界だ。けど、陽菜にとっては、それが「日常」なんだろう。

「もし神社を継ぐってなったら、ずっとここに残るのか？」

「うん、たぶんね」

陽菜はあつさりと頷く。

奏多がもしこの町を出て行ったら、陽菜は、ここに残る。それが、どうしようもなく寂しいことのように感じた。

「……なあ、もし神社がなかったら、どこに行きたかった？」

「え？」

陽菜は驚いたように奏多を見上げる。

「うーん……そんなこと、考えたことなかったな」

「そっか」

「でも……」

陽菜は少しだけ目を伏せる。

「奏多くんが行くところなら、どこでも楽しそうかもね」

陽菜の笑顔。その飾らない自然な表情にドキッとしてしまい、奏多は目を逸らしてしまう。こうして二人は歩いて行く。けれど気づけば、陽菜が少しだけ歩幅を大きくしていた。奏多の歩くペースに合わせるために、無意識にそうしているんだろう。たったそれだけのことで、なんとなく胸が締めつけられる。

陽菜は優しく、気が利いて、誰からも好かれる。小柄だけど意外と胸もある。そんな陽菜が男子の人氣が高いのはわかりきっていた。

「なあ、お前、また告られたらしいな」

奏多は、なるべく軽い調子で言った。

「んー？」

陽菜は少し考えるようにして、首を傾げる。

「え、誰の情報？」

「いや、なんか女子が騒いでて聞こえただけ」

「あー……まあ、されたっちゃされたけど」

「で、また断ったのか？」

「うん、もちろん」

「……ふーん」

奏多はポケットに手をつ突っ込んだまま、空を見上げる。

「なんかさ、お前って告られても動じないよな」

「え、そう？」

「そうだろ。普通、もっと照れるとか、悩むとか、あるもんじゃねえの？」

「んー……でも、好きじゃない人と付き合うのって、わたしは無理かなあって」

「……まあ、それはそうだけど」

「奏多くんは？ 女子から告白されたことあるでしょ？」

「まあ、あるにはあるけど」

とっさに出てしまった。本当は女子から告白されたことなんて一度もない。無意味な男のプライドがこんなところで出てしまった。

「え、じゃあなんで付き合わないの？」

奏多は言葉に詰まる。

そんなの、決まってる。けどそれを言うことはできなくて、「興味ねえし」とだけ答えた。陽菜は「ふーん」と言って、少しだけ笑った。その笑顔は、どこか意味深で含みを持ったものに見えた。

「なあ、陽菜」

「ん？」

「お前ってさ、好きなやついんの？」

自分で言っておきながら、心臓が跳ねるのがわかった。

陽菜は一瞬だけ驚いたように目を丸くしたが、すぐに口元に手を当てて、くすくすと笑った。

「なんでそんなこと聞くの？」

「いや……ちょっと気になっただけ」

「ふーん？」

陽菜は奏多の顔をじっと見つめる。

「……さあ、どうだろうね？」

そう言っ、て、からかうように微笑んだ。その笑顔が、少しだけ怖かった。冗談めかしているのに、どこか鋭くて、奏多の心を見透かしているようだった。

「……まあ、どうでもいいけどな」

奏多は視線を逸らし、そっけなく言った。

陽菜は「ふふっ」と笑いながら、奏多の腕を軽く小突いた。

「奏多くんってさ、ほんとにわかりやすいよね」

「は？」

「ううん、なんでもない」

陽菜はすつと前を向き、また歩き始める。

その後ろ姿を見ながら、奏多は何とも言えない感覚に襲われていた。

住宅街を抜けてしばらく歩くと鳥居が見えてくる。その鳥居をくぐると、急な石段が続いている。

奏多は、昔からこの神社があまり得意ではなかった。理由は、よくわからない。

ただ、子供の頃から何度も来ているはずなのに、いつもどこか落ち着かない気分になる。でも陽菜は、こんな場所ですつと育ってきたんだよな。

「今日も手伝いか？」

奏多が尋ねると、陽菜は「うん」と小さく頷いた。

「神社の手伝いって、大変なんだろ」

陽菜の表情が、一瞬だけ硬くなる。

「……うん」

短く答えて、それから視線を足元に落とす。

陽菜は淡々と話すが、その声は少しだけ掠れていた。

「辞めればいいじゃん」

「……簡単に言うね」

「簡単だろ。嫌ならやめりゃいい」

陽菜は立ち止まり、奏多をじっと見上げた。

夕日が照らす中、その顔は妙に影がかかって見えた。

「……奏多くんはさ、わたしが困ってたら、なんでも助けてくれる？」

その問いかけに、奏多は少しだけ息を飲んだ。

陽菜の声は、いつものように明るいの、どこか歪んで聞こえた。

「……当たり前だろ」

奏多がそう答えると、陽菜は小さく微笑んだ。

「ふふ、ありがと」

その笑顔が、ほんの少しだけ寂しそうに見えたのは、気のせいだろうか。

春の風が吹く。神社の鳥居が見えてくる。

「なあ、たまには誰かと寄り道したりとかしないのか？」

「なに言ってるの？ 奏多くんがわたしを送るのは、もはや宿命みたいなもんでしょ？」

「どんな宿命だよ」

「でも、やめる気ないでしょ？」

まあ、そうなんだけど。

こいつが、誰か別のやつと帰るようになったら、俺は耐えられるのか？

こいつが、俺以外の誰かを好きになったら？

今の関係が壊れるのが嫌だとか、勇気がないだとか、そういうのじゃない。奏多は自然体な陽菜のことが好きで、その陽菜を「女」として見てしまうことに凄まじい自己險悪を感じてしまうのだ。

「……なあ、陽菜」

けれどその言葉は、自然と出ていた。恐らく溜まり切った陽菜への思いが満ち切ってあふれ出してしまったんだろう。

「ん？」

「……俺さ、お前のこと、好きなんだ」

言ってしまった。言いたくなかったけれど、言わずにいられなかった。自分本位なのが本当に許せない。でも、陽菜の肩を抱きしめたかったんだ。

陽菜は驚いた顔をしていた。そして、次の瞬間。

「やっと言ったね」

陽菜は、ふっと微笑んだ。

「わたしね、ずっと待ってたんだよ？」

奏多の心臓が跳ねる。こんな言い方だが、奏多としては正式な告白のつもりだった。

「なら……」

奏多が続きを言おうとした瞬間、陽菜がそっと一歩近づいた。

「でもね」

陽菜は奏多の首に腕を回し、軽く背伸びをする。

「奏多くんは、まだわたしのこと、全部は知らないと思う」

至近距離から発せられる陽菜の声。吐息が唇に掛かり、心臓が踊り続ける。

「だから、わたしのこと、もっと知ってほしいの。返事はその後でいいかな？」
陽菜の唇が、奏多の唇に触れた。

柔らかな唇。僅かに感じる吐息。

それを感じた瞬間、奏多の意識は暗闇に沈んでいった。